

広島市江波山気象館所蔵の気象学史的資料[†]

遠 藤 正 智*

1. はじめに

本稿は2020年10月29日、日本気象学会秋季大会期間中に開かれた第8回気象学史研究会（オンライン）での講演内容の概要を記したものである。

2. 広島市江波山気象館について

広島市江波山気象館は、旧広島地方気象台建物を活用し1992（平成4）年6月1日（気象記念日）に開館した、気象や自然科学を専門に扱う登録博物館である。

気象館・本館は、1934（昭和9）年に広島県立広島測候所として建設され、1939（昭和14）年に国営移管、1987（昭和62）年の現在地移転まで広島地方気象台として使用された。

このような背景から、江波山気象館は広島地方気象台寄贈資料を中心に、気象測器約70点、図書系資料約2000点など様々な資料を収蔵し、展示や調査研究に供している。この中には1879（明治12）年の広島県立広島測候所創設の経緯を伝える資料や『気象関係の広島原子爆弾被害調査報告』（後出）を作成するために宇田道隆氏らが調査した資料など、気象学史的に重要なものが多数含まれている。

3. 広島県立広島測候所について

広島県立広島測候所は設立以後、3回の移転・国有化などの組織変更を経て、現在の広島地方気象台となつた。この経緯の一部を第1表に記す。

4. 広島市江波山気象館所蔵の気象学史資料の概要について

江波山気象館が所蔵している気象学史資料のうち、ごく一部ではあるが概要を紹介する。安藤（1971）を参考とした。なお、本稿で使用している資料名は便宜上のものであり、字体は原資料と異なっている場合が

第1表 広島の気象台の歩み（広島地方気象台 1982などによる）。

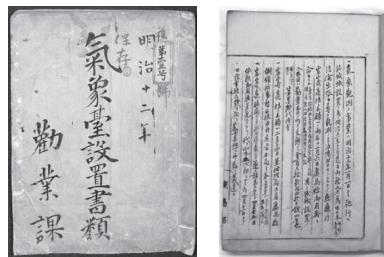
| 年月日 | できごと |
|-------------------|---|
| 1879（明治12）年1月1日 | 広島県安芸国広島区水主町（現在の広島市中区加古町）の広島県庁内に広島県立広島測候所創設 |
| 1892（明治25）年12月31日 | 広島市大字国泰寺村（現在の中区千田町）に移転 |
| 1935（昭和10）年1月1日 | 広島市江波町（現在の中区江波南町）に移転 |
| 1939（昭和14）年11月1日 | 国営移管。文部省中央気象台広島測候所となる |
| 1943（昭和18）年11月1日 | 運輸通信省移管。同11月15日広島地方気象台となる |
| 1945（昭和20）年8月11日 | 広島管区気象台となる |
| 1949（昭和24）年11月1日 | 広島地方気象台となる |
| 1987（昭和62）年12月22日 | 広島市中区上八丁堀（広島合同庁舎・現在地）に移転 |
| 1990（平成2）年11月1日 | 旧広島地方気象台建物を保存活用のため広島市に移管 |
| 1992（平成4）年6月1日 | 広島市江波山気象館開館 |
| 2000（平成12）年7月25日 | 旧広島地方気象台建物が広島市重要有形文化財に指定 |

* Masatomo ENDO, 広島市江波山気象館.

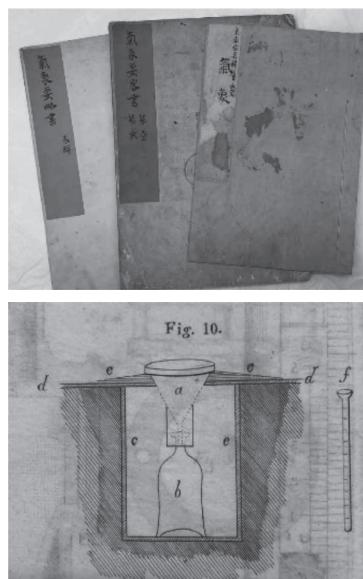
endo@ebayama.jp

© 2022 日本気象学会

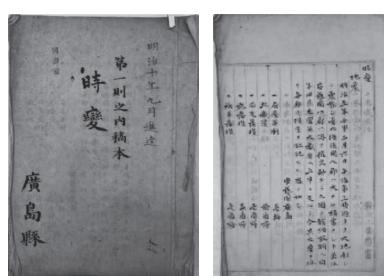
[†] 第8回気象学史研究会「明治創設期の測候所と気象学：期待と役割—旧測候所保存資料から探る」（2020年10月29日）講演記録。



第1図 『明治十二年気象台設置書類 勧業課』(縦24cm×横19cm)の表紙、及び、資料冒頭部分。



第2図 『気象要略書 第壱 第式』、『気象要略書 表解』(縦27cm×横19cm)、『気象要略訳書 附録 気象』(縦24cm×横16cm) 各表紙、及び、『気象要略書 附録 気象』のうち Fig. 10雨計。



第3図 『明治廿年九月進達 第一則之内稿本 時変 広島県』表紙(縦28cm×横19cm)。「明治十年九月進達」は朱書き、及び、資料冒頭「地震」部分。

ある。資料サイズは概略である。

『明治十二年気象台設置書類 勧業課』(第1図)

広島に測候所を設立する際、当時の内務省地理局とのやりとりなどが記録されている。広島地方気象台(1962)に詳しい。

『気象要略書、第壱 第式、表解、附録』(第2図)

測候所開設当初に持ち込まれたと思われるが、詳細は不明である。気象観測の方法や注意点などが記され、附録の図もとても丁寧にかつ精密に描かれている。全3冊からなっており、スミソニアン気象観測法の邦訳と言われている。

『明治十年九月進達 第一則之内稿本 時変 広島県』(第3図)

1872(明治5)年から1874(明治7)年の県内で発生した地震・大雨・火災・疫病などの概要を記したものである。

『経天覧 明治十八年八月 広島気象一覧図』(第4図)

表装されており、大判(縦57cm×横38cm)で多色を利用した丁寧な仕上げである。内部は折りたたみ式巻紙状で全部開くと15m程度の大型のものである。

1885(明治18)年8月3日、明治天皇山陽道巡幸に際し広島県庁を行幸、各課御巡覧・物産天覧が行われた(明治天皇聖蹟保存会 1933)。この際に陳列したものではないかと推測される。

『明治廿年八月一九日日蝕前後気象観測書類 広島測候所』(第5図)

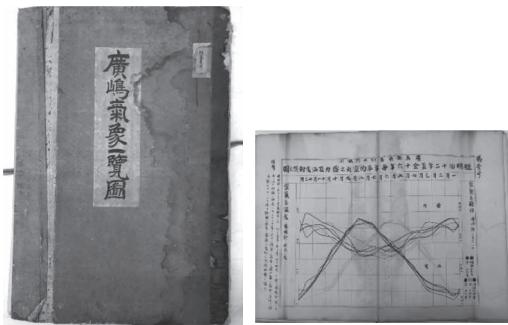
広島県内の役所等から集められた日食の観測記録・報告をまとめたもの。広島県内の観測網の一端を垣間見ることができる。

『明治二十三年一月ヨリ 管内 暴風雨 出水 降雹、霰臨時 報告調査表』(第6図)

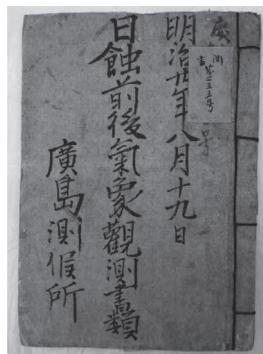
1890(明治23)年から1896(明治29)年までの広島県内各所で発生した暴風雨などの概要を記したもの。測候所だけでなく役所や村長からの報告も記載されている。

『三十七、八年戦役軍用気象電報 天気図』(第7図)

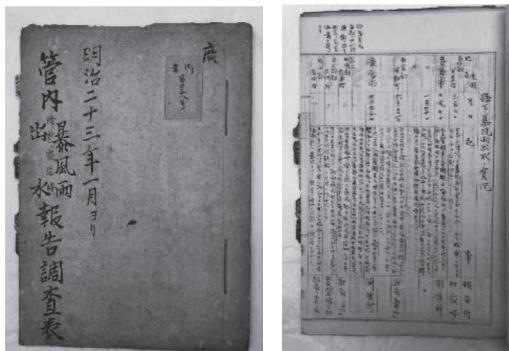
日露戦争(1904-1905・明治37-38年)当時、広島県



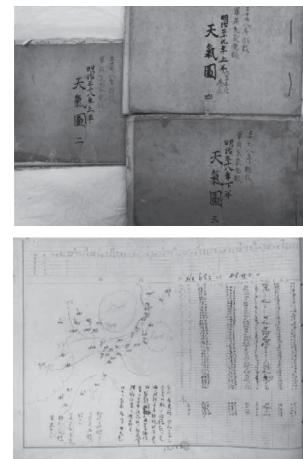
第4図 『経天覧 明治十八年八月 広島気象一覧図』表紙(縦57cm×横38cm)。「経天覧 明治十八年八月」は朱書き。「第壹号広島県広島測候所観測從明治十二年至全十六年毎年平均空氣之壓力及溫度對照之図」。グラフは色分けして描かれている。



第5図 『明治廿年八月一九日日蝕前後氣象觀測書類 広島測候所』表紙(縦24cm×横17cm)。



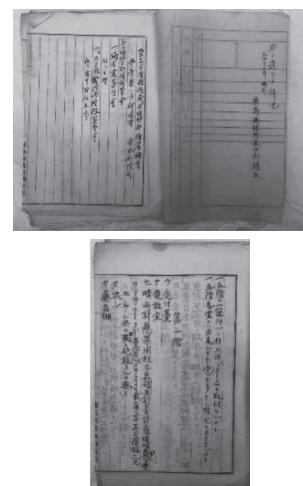
第6図 『明治二十三年一月ヨリ 管内 暴風雨出水 降雹, 露臨時 報告調査表』表紙(縦28cm×横20cm)。「出水 降雹, 露臨時」は朱書き。「県下暴風出水ノ実況」明治23年冒頭部分。



第7図 『三十七, 八年戦役軍用気象電報 明治三十八年上半天氣図 二』『同 明治三十八年下半天氣図 三』『同 明治三十九年上半 六月十五日限廢止 天氣図 四』各表紙(各縦26cm×横37cm)。「三十七, 八年戦役軍用気象電報」、「六月十五日限廢止」は朱書き。資料明治三十八年五月二七日。



第8図 広島測候所外観写真「明治三十三年三月四日撮影」(縦20cm×横26cm)。



第9図 『大正一二年度県税歳臨時部予算調査書』冒頭部分(縦28cm×横20cm)。及び「第一階」記載部分冒頭。



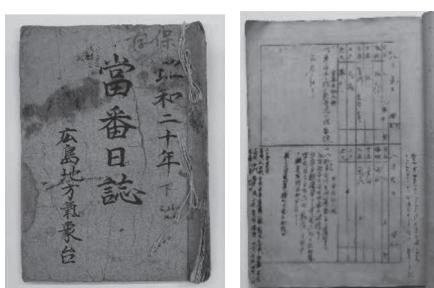
第10図 広島測候所外観写真「大正十五年五月撮影」(縦27cm×横42cm)。



第11図 旧広島地方気象台（現江波山気象館・本館）外観写真（縦11cm×横15cm）。



第12図 『広島測候所 庁舎及接続家姿図及断面図』(縦56cm×横78cm)。



第13図 『昭和二十年下期 当番日誌 広島地方気象台』表紙 (縦28cm×横20cm)。8月6日部分。

立測候所長岡本保佐らの手により作られた。東京だけでなく、地方の測候所でも天気図が作られていた事例である。

『広島測候所外観写真 明治三十三年三月四日撮影』(第8図)

広島測候所は1879（明治12）年広島県庁内に設立された。これは、当時の県庁からほど近い地に1892（明治25）年に移転した、2代目測候所の外観写真である。

『大正一二年度県税歳臨時部予算調書』(第9図)

広島測候所の拡張を行った際の予算書と思われ、必要な附属品・物品などが細かく記載されている。

『広島測候所外観写真 大正十五年五月撮影』(第10図)

先の1900（明治33）年撮影の写真（第8図）と同じ位置の広島測候所である。建物が増築されていたり、路面電車開通などの都市化が進んでいたりと興味深い。

『旧広島地方気象台（現江波山気象館・本館）外観写真』(第11図)

3代目広島測候所完成の1934（昭和9）年から間もない頃（撮影日不詳）に撮影された外観写真である。

『広島測候所 庁舎及接続家姿図及断面図』(第12図)

1934（昭和9）年竣工の広島測候所は、広島県土木部営繕課により設計された。本庁舎は鉄筋コンクリート造り一部3階建て、延べ坪173.7坪（約574m²）の規模である。また現存していないが、平屋建ての所長官舎や附属庁舎なども整備された。

『昭和二十年下期 当番日誌 広島地方気象台』(第13図)

1945（昭和20）年6月26日から12月31日に気象台員によって書かれた日誌。公的記録ではないものの第二次世界大戦終戦前の様子が記録されている。

8月6日の「当番者記入欄」には「八時十五分頃 B29広島市ヲ爆撃シ、当台測器及当台附属品破損セリ。台員半数爆風ノタメ負傷シ一部ハ江波陸軍病院ニテ手当シ一部ハ軽傷ノタメ当台ニテ専習科生ガ手当セリ。盛シニ火事雷発生シ横川方面大雨降ル。」と、また右欄外に後日の追記として「事務員（女）」の「原爆死」が記載されている。

『広島原子爆弾被害調査報告（気象関係）昭和22年11月

『広島管区気象台』(第14図)

日本学術振興会刊版(1953(昭和28)年発行)に先駆け広島で印刷された冊子である。この“広島版”は1947(昭和22)年発行で、手書き原稿を印刷したものである。

『原爆被害聞き取り調査メモ』(第15図)

『広島原子爆弾被害調査報告』を作成するために宇田道隆氏らが県内各所で原爆被害について聞き取り調査を行った際に書かれた50枚以上にものぼるメモの束である。一枚一枚の紙を針金等で束ねてある。聞き取り調査した内容の一部は『広島原子爆弾被害調査報告』に記載されている。第15図の部分は9月30日(日)に広島市北部の可部駅で聞き取ったものである。なお年の記載はないが、1945(昭和20)年9月30日である。

『気象に関する広島原子爆弾被害調査報告 原稿』(第16図)

同様の原稿が数種類あるため、何度も推敲したことが窺える。

『大阪管区気象台 観測記録 メモ』(第17図)

『気象関係の広島原子爆弾被害調査報告』「5. 爆撃と火災に伴隨した驟雨現象(1) 都市焼夷爆撃に伴なた(原文ママ) 驟雨現象との比較」部分の考察に使われたものと思われる。1945(昭和20)年6月1日・7日・15日の大阪空襲時の気象観測記録を記載したもの。なお日本学術振興会刊版には「第2表に示した昭和26年6月1日7日15日」と書かれているが、先に紹介した昭和22年11月広島管区気象台版(第14図)は単に「昭和20年6月」となっており、日本学術振興会刊版で活字化する際に起きた誤植であろう。

5. 結びにかえて

本講演は限られた時間内で可能な限り多数の資料を紹介することに主眼に置いた。

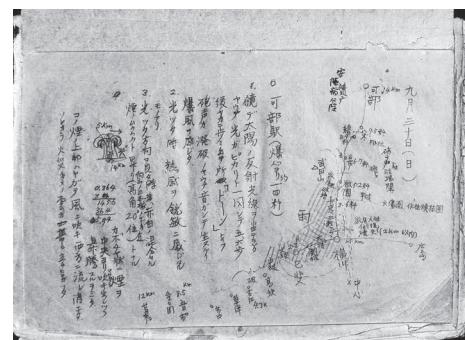
各資料の詳細な研究や考察については諸氏の研究に委ねたいと思う。また、同時に発表を行った宮川氏の論(宮川 2022)もぜひ読んでいただきたい。

一次資料からしか得られない情報は多いため、今後も天気を専門に扱う博物館として各種資料を適切に保管し活用を図っていきたい。

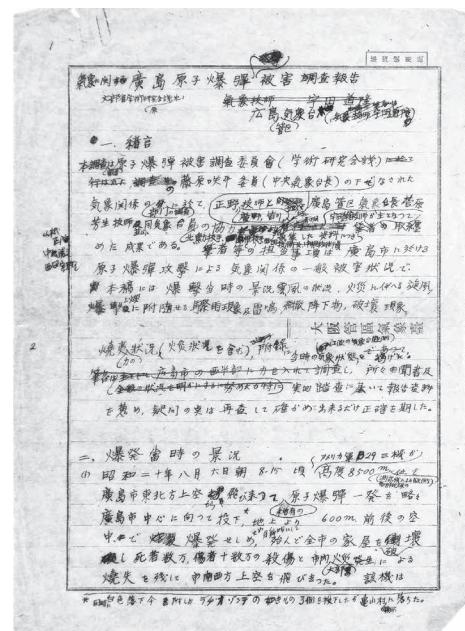
調査研究で資料の閲覧が必要な場合は当館に相談いただきたく思う。



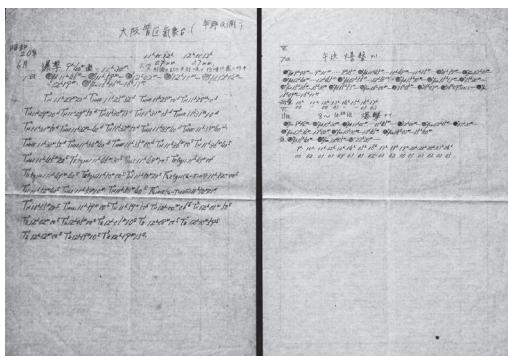
第14図 『広島原爆被害調査報告 (気象関係)
昭和22年11月広島管区気象台』(A5判)。
「爆発当時の景況」の図は重ねて赤で印刷。



第15図 原爆被害聞き取り調査メモ (B5判程度)。



第16図 『気象に関する広島原爆被害調査報告 原稿1ページ目 (B4判)。



第17図 『大阪管区気象台』観測記録 メモ 計2枚 (A4判).

参考文献

- 安藤隆夫, 1971: 広島地方気象台の古文書べつ見. 百年史編纂ニュース, (1), 6-9.
- 広島地方気象台, 1962: 気象台設置一件—広島地方気象台保存資料一. 測候時報, 29, 330-338.
- 広島地方気象台, 1982: 広島の気象百年誌. 239pp.
- 明治天皇聖蹟保存会編, 1933: 明治天皇行幸年表. 大行堂, 315pp.
- 宮川卓也, 2021: 草創期における気象観測所の役割と期待: 広島測候所を事例に. 天気, 69, 345-351.